



Handwritten characters in vertical columns on the left side of the cover, likely the title or author's name. The characters are dark and somewhat faded.

^ 13  
2906  
10



抄

春曉八幡佳年四編序

早稲田

夫行遠者必自邇登高者必自卑

故不故人者童子之言取兩者深乃聽其藉

予志少不銜遠若說の淺きを顯し

鄙俚信のたひも家系を續く事

年未替満人ほ山住より二才子のまゝに傳を

へ 13  
2906  
10

昭和九年  
七月五日  
晴末

渡邊覺之血澤の満ち来る水と改名一東社である  
と考へて心算又ふり友人の筆を借る拙し  
と心と自作愛玩をまきく書實の御と  
草廬と河津有留の倍もされ梅の由縁も  
ふたふたが顔中おのまじく夏好の應ず  
と考へて数中邪き海づ中ぬれ此まの境も實

出づるハ懐持をいふハ平林の精ふ  
とて鐘み孝ひひかすすは是金幸乃名金  
自性もまが出取の時刻をうはき成して  
金幸今ハ満尾の表紙つぎいふは  
終自夜も終も倅然私なむとふ

ふろく 二六 四半 看官の 森也を 受に  
情 種 化の 著 述を 捨 鐘の 教 受 元 是  
と 名 じ の 名 じ 題 元 是 じ 女 子 じ 追  
若 作 じ 女 子 時 張 じ 女 子 流 業 の 物 多 じ  
四 方 の 三 重 回 じ 女 子 前 方 じ 流 業 の 物 多 じ  
日 下 増 じ 女 子 果 然 久 じ 女 子 流 業 の 物 多 じ

上の 種 受 じ 女 子 流 業 の 物 多 じ  
駭 じ 女 子 流 業 の 物 多 じ  
流 業 の 物 多 じ  
斬 獨 じ 女 子 流 業 の 物 多 じ  
古 人 の 由 似 同 じ 女 子 流 業 の 物 多 じ  
刻 じ 女 子 流 業 の 物 多 じ



繡枕紅衾  
 曉意濃  
 啼鶯太  
 似不相  
 容  
 夢魂苦  
 恨歸來早



不盡瀛  
 洲第一峰



第一画

於直



花鳥乃  
使也

人相  
花使

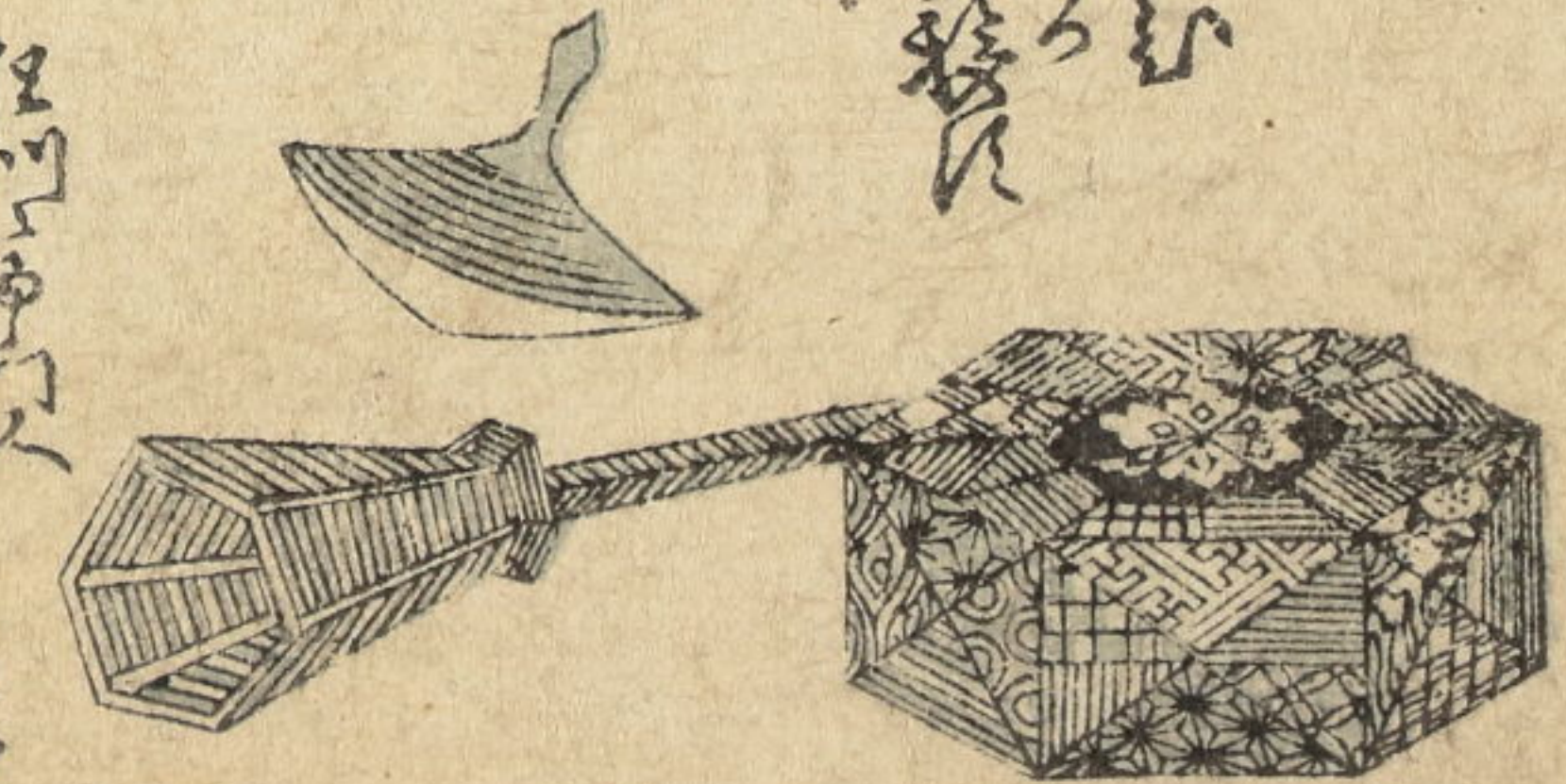
英一画

狂文亭  
春江



古今の  
真名序

昔もはたき物なつりくわらた  
 遠山の志乃くえぬ成もきつた  
 車一車とつらの一車子のり方をきか  
 けし本落よするすは清の屋まを  
 探さすは鳥のさか草子むね  
 かり野路は辺とみつらう  
 色あはれもあはれむね  
 色あはれもあはれむね



第一巻下  
 第二巻下  
 第三巻下  
 第四巻下

春曉八幡佳年四編卷之二

江戸 為永春水著

第十九章

大あや虫もがらぬのあまも馬道もあつた  
 東屋がねのあまもねの山あつた  
 系族族族あまもねのあまもね  
 孫あつたあまもねのあまもね

















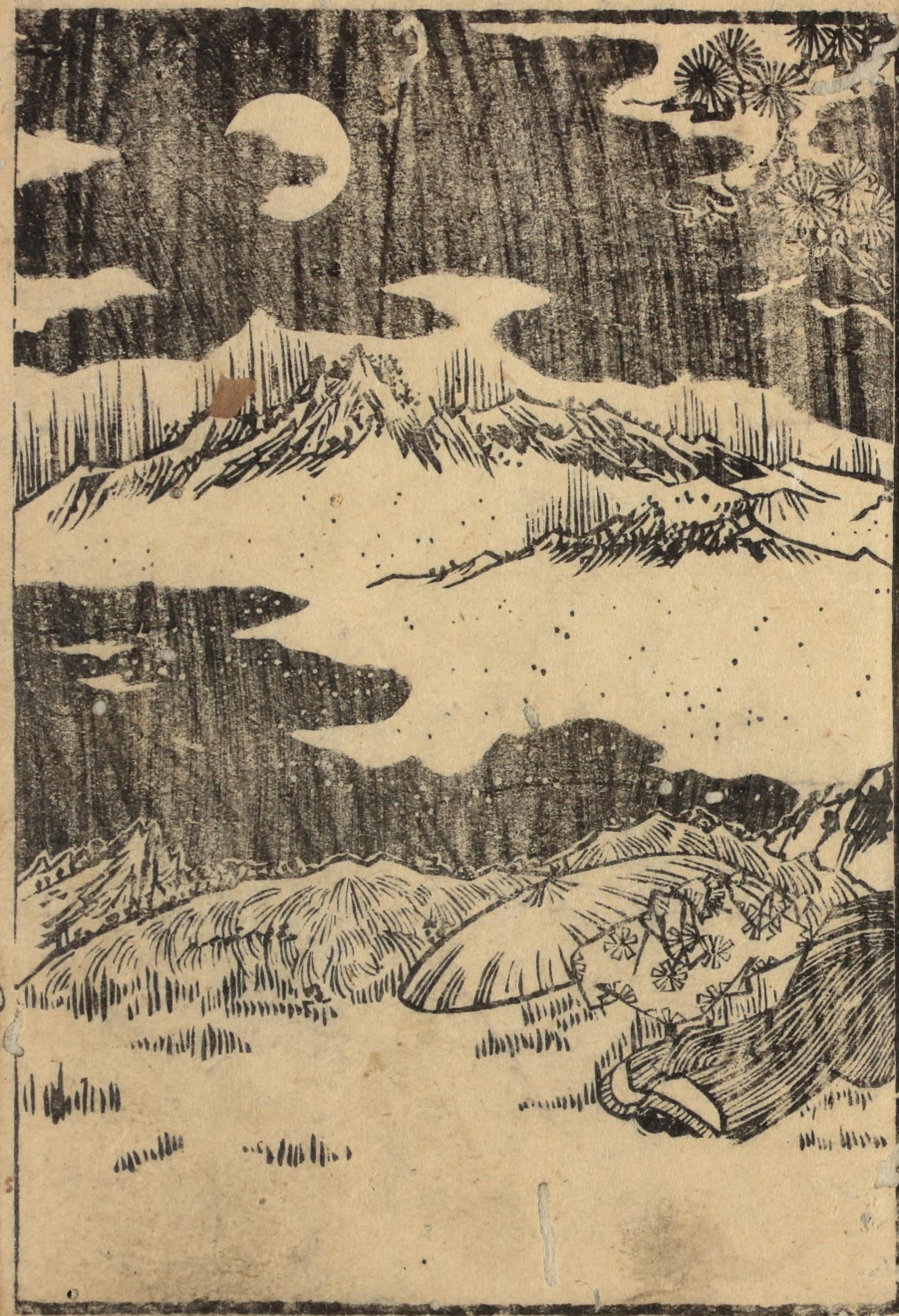






















八幡住年  
拾遺笑談

春色緑杏本



全六冊

八幡住年十八冊に説残一冊拾遺のあひあ  
ひ多くはまゝ榮ゆるの縁のねの海はあつて  
かりあるを命の先ねをいふことせらるる  
ゆゑに傳ふる退かのお冊はうへへ  
御うらやま

春成の春乃

梵 全六冊

